巻頭言 庶務理事に就いて再認識したこと

小谷 明

A Trivial Comment to the Polarographic Society of Japan

Akira Kotani

今現在、会誌の 59 巻 2 号の脱稿日が迫っており、本部記事に加えて本稿を用意しています。昨年、高尾での第 58 回ポーラログラフィーおよび電気分析化学討論会において大塚先生より巻頭言の執筆依頼をいただきました。歴史ある本誌に私のようなものは、非常におこがましい上に、文才の無さも手伝って困っておりました。改めて日本ポーラログラフ学会はどんなものかと会誌を開いてみると、いろいろと本会の有難味を再認識しました。駄文で恐縮ですが、その旨を記させていただきます。

さて、私にとって本会との初めての関りは、1999 年に長崎で開催された第 45 回ポーラログラフィーおよび電気分析化学討論会（中嶋直敏 先生が世話人）で口頭発表した折です。東京薬科大学の助手として、社会人 1 年目でしたが、会期中の講演と懇親会を通じて、アットホームな学会であることが、すぐに感じ取れました。それ以降、2008 年には評議員として加えていただき、2013 年 1 月より庶務理事を仰せつかって、現在に至っています。

現在、庶務理事になって 8 ヶ月目、おかげさまで e-mail による 2 回目の理事会も終わりました。小山先生の巻頭言に記

載のとおり (*Rev. Polarogr.*, **54**, 67 (2008))、本会の運営や会議は e-mail がほとんどで、きちんとしたルールが敷かれています。前任者の西先生より引き継ぎました約 500 MB もの歴代庶務ファイルを見ると、システムティックに事業活動が行われてきたことがうかがえます。それらの助けを受けながら庶務理事の仕事を進めています。本会の事業・運営等に直接的に関わることができ、貴重な経験をしています。

e-mail は、コミュニケーション手段として大変便利であり、遠隔地であっても情報を迅速に送ることができるメリットがあります。しかし、一般的なデメリットとして、相手とリアルタイムで接触しているわけではないので e-mail を相手に見てもらったタイミングを送信者側はコントロールできない、相手の様子は判らないので誤解されることもある、などが挙げられます。『目は口ほどにものを言う』という諺ですが、これは科学的にも実証されているようです。人類が進化の過程で獲得した目の特徴である『強膜（白目）が広く露出し、大きな可動性のある眼球』と『眼裂が非常に横長』は、他人とコミュニケーションを取るために重要な役割を果たしているそうです。相手と顔を向

き合わせるコミュニケーションが如何に不可欠であるかが判ります。

しかし、理事や幹事の先生方と e-mail で連絡する機会は毎月のようにありますが、上述のデメリットはあまり感じていません。これは、これまでに関連の先生方と討論会等で気軽にお会いし、ざっくばらんなお話ができ、人となりや雰囲気イメージした上で e-mail の送受信ができていたからと考えています。樋上先生が記した、本会の自由闊達な雰囲気 (*Rev. Polarogr.*, **52**, 155 (2006)) や楠先生が記した、本会は暖かな人の輪がある (*Rev. Polarogr.*, **55**, 73 (2009)) というコメントに共感いたします。従って、e-mail を便利に使う前提として、年に 1 度の討論会で充分にお互いを知った上でコミュニケーションをとることが重要と、考えるようになりました。

学会は、自己の研究成果を発表してそ

の妥当性について他の研究者と科学的な討論をする場、研究者同士の交流の場として重要な役割を担いますが、個人的には後者の方が大切ではないかと感じています。幸いにも本会は、青木先生 (*Rev. Polarogr.*, **44**, 103 (1998)) や西先生 (*Rev. Polarogr.*, **57**, 1 (2011)) よりご意見をいただいている『討論』が充実していると思います。討論と交流。これからも、この両軸をしっかり維持することで本会は、さらなる飛躍を遂げるのではないかと考えています。

このような庶務理事ですが、巻頭言の顔を知っていただくとコミュニケーションが進むということで、駄文をお許しいただきます。どうぞご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

(こたに あきら・東京薬科大学薬学部、
本会庶務理事)